

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント推進校 実施報告書

【都道府県】 福岡県

【学校名】 宗像市立 吉武小学校

【テーマ】 I II III IV ⑤

- I オリンピズムの教育的価値
- II おもてなし精神とボランティア
- III パラリンピックと障害者スポーツ
- IV 日本文化と異文化・国際理解
- V スポーツを楽しむ心

【実践研究タイトル】

地域の競技団体を活用したオリンピック・パラリンピック教育

【実施学年、部、講座等】

第3学年（男子8名・女子11名）

第4学年（男子5名・女子8名）

【目的・ねらい】

地域のラグビー競技団体から講師を招き、指導を受けることで、互いに敬意を払いルールを尊重するフェアプレー精神や、ベストを尽くし目標に向かって全力で取り組む心を育む。（卓越・敬意/尊重）

【種類】（当てはまるものに○）

各教科（ 体育 ） ・道徳 ・外国語活動 ・総合的な学習の時間 ・特別活動
・教科以外での取組（ ）

【実践内容等】

（実施内容）

1 タグラグビー訪問授業

（1）指導者 一般財団法人サニックススポーツ振興財団 職員
宗像サニックスブルース 選手 1～2名での訪問

（2）実施回数

- 第1回 11月30日（月）2校時
ラグビーボール・タグに慣れる
- 第2回 12月3日（木）2校時
競技の特性とルールの理解 練習ゲーム
- 第3回 12月8日（火）2校時
競技の特性とルールの理解 練習ゲーム
審判のやり方を覚える
- 第4回 12月11日（金）2校時
チーム対抗でゲームを行う

※不足する内容については、担任が授業で補う。



ボール・タグに慣れる活動(第1回)



チーム対抗ゲーム(第4回)

2 著名な選手との交流会

ワールドカップに出場した選手やトップリーグの選手たちとの交流を実施

3 詳しい実践の例（第3回）

（1）本時の目的

- チームメイトと協力して全員が攻撃・守備に活躍できるようにする。
- パスをつなげるために走る方向やパスを出す相手、パスをもらう位置、あるいは、タグを取るための位置や動きを工夫してゲームを行う。
- 審判に挑戦することで、ルールを理解を深めるとともに、互いに敬意を払うフェアプレー精神を育む。

（2）指導の実際

ア 前時に行ったゲームの目的とルールを確認して本時のめあてをつかむ。

【目的】 攻撃…前にあるゴールラインへ走りトライする。

守備…ボールを持っている相手のタグを取って攻撃を防ぐ。

【ルール】 ①ぶつからない ②パスを前に投げない ③横の線からでない 等

前回初めてゲームを行った児童もいるので、質問形式で発言を促すことで、子どもたちは自発的にゲームの目的とルールを振り返ることができた。その後、「パスカットしてよい」という新しいルールを加えることを提案し、攻撃や守備に工夫が必要になることに気付かせた。

イ 新しいルールを加え練習ゲームを行う。

【新しいルール】

- ①タグが2本ついている人がパスしたボールはパスカットしてよい。
- ②タグを取られて1本になった人のパスはパスカットできない。
- ③タグが1本の人のパスを受ける人のタグを待ち伏せして取ってはならない。

「守備側が先回りするとパスカットやタグを取ることができず、攻撃側は攻められず面白くない。」など、GTに専門的な視点での説明をしてもらうことで、ルールの妥当性に気付かせ、ルールを尊重する気持ちを持たせることができた。

また、実際のゲームの場面を設定し、子どもたちを実際に動かして説明を行った。「むやみにパスをしていると前に進まず、パスカットされる。」ことなど新しいルールが加わることで変化することに気付かせ、パスカットできる時、できない時を考えさせることができた。

ウ 試合形式でゲームを行う。

- ①ゲームを1回行ってルールの確認をする。
- ②相手を替えてゲームを行う。

審判を子どもたちに行わせ、ゲームを客観的に見る機会をつくることで、新しいルールの理解を深めるとともに、ルールを尊重するフェアプレー精神の大切さに気付かせることができた。

また、GTに、「5秒話し合いをして自らの反則を認め、5秒たったらジャンケンで決める」などルールの適用で言い合いになった場合の対応について話をしてもらい、互いに敬意を払う気持ちを高めることができた。

更に、ゲーム中、GTには「がら空きを見つけて走ろう！」「前パスにならない位置は？」な



新しいルールの確認



ルールの適用に関する指導

ど、専門的視点から声かけをしてもらうことで、子どもたちのゲームの目標に対する技能を高めることができた。

エ 学習の振り返りをして加えたルールを確認し、次時への見通しを持つ。

プレーヤーの視点での感想を交流することで、自分や友達の技能の高まりやルールに合わせて攻撃や守備を工夫できたことを実感させることができた。また、審判としての感想を交流させることで、ルールを尊重し、互いに敬意を払うフェアプレー精神の大切さも全体へ広げることができた。その後、疑問点を出し合いルールを整理し、本時のルールで次時も試合を行うことを確認し、次時への見通しを持てるようにした。

（実践上の工夫点、留意点等）

- ・GTには以前もタグラグビーの指導に関わっていただいていたが、事前の打ち合わせで本事業の趣旨を説明し、互いに敬意を払いルールを尊重するフェアプレー精神や、ベストを尽くし目標に向かって全力で取り組む心を育むために、ラグビー競技の経験を基にした指導や助言を行ってもらうように依頼した。
- ・スポーツを楽しむ心を継続・発展的に育んでいけるよう、事後も関係団体と連絡調整し、ワールドカップに出場した選手やトップリーグの選手たちとの交流を行った。

（成果）

- 地域のラグビー競技団体から講師を招き、専門的な立場からの指導で、技能の高まりはもちろん、競技に対する関心も高めることができ、地域コミュニティ主催で放課後に行われているタグラグビー教室への参加者が増えた。
- ラグビー競技の経験を基にした指導や助言により、授業の回を重ねる毎に、ゲーム中にチームメイトと声を掛け合う姿や、相手チームの良さを感想で発表することが多くなった。また、ルールの適用で言い合いになる場面も少なくなり、言い合いになったとしても審判を中心に解決できるようになってきた。

【オリンピック・パラリンピック教育の実施に伴う課題点】

- 説明会からの計画、実践、報告までの期間が短く、十分な準備ができなかった。
- 「互いに敬意を払いルールを尊重するフェアプレー精神や、ベストを尽くし目標に向かって全力で取り組む心」の育成は、本実践だけで完成するものではないと感じた。計画にもあるが、今後も競技団体と連携し、選手との交流会や定期的・継続的な指導をカリキュラムと照らし合わせて計画的に実施していく必要がある。
- 本実践は体育科の学習と関連させて行った。その上で本事業のねらいと体育科のねらいとの整合性を図った計画を立てることが難しいと感じた。